第一部　研究論文

# 訓蒙図彙と祐信春本・絵本

## ―『色ひいな形』から『百人女郎品定』まで

石上阿希　いしがみ あき

## はじめに

西川祐信の春本、絵本の特色の一つに網羅主義的趣向が挙げられる。祐信は、あらゆる階層の人々の性生活や着物、風俗をこれらの媒体で描き分けている。その代表的作品といえるのが、八文字屋から刊行された『百人女郎品定』（享保八年〈一七二三〉刊）であろう。本書は、書名の通り、女性にまつわる百種類の身分や職業を分類し、詳細に描写している。本書に見られる網羅主義について、山本ゆかり氏は享保期における百科事典の編纂・刊行の隆盛との関連を指摘し[1]、白倉敬彦氏は同趣向が春本『色ひいな形』（八文字屋、宝永八年〈一七一一〉刊）や『艶女玉簾』（享保四年〈一七一九〉刊）にも見られることを指摘している[2]。

祐信は『百人女郎品定』以前に、雛形本でも網羅主義的作品を多く制作している。これらの春本や雛形本の版元は、主に八文字屋であった。祐信や八文字屋が『色ひいな形』をはじめとした網羅主義的作品を企画した背景には、どのような時代背景があったのだろうか。本稿では、同時代性を踏まえつつ、それらの作品群を編年的に通覧しながら、祐信と八文字屋が「あらゆる階層の人々を描く」という趣向をどのように展開させていき、『百人女郎品定』へと結実させたのかを明らかにする。

## 一、春本『色ひいな形』と『情ひな形』

宝永七年（一七一〇）七月刊行の『野白内証鑑』の四巻巻末には『風流色雛形』という春本について、次のような広告が載る[3]。

▲何れ茂様へ申上まする
大和絵師京西川祐信ニ筆の命毛ヲ尽させ肝門の秘書珍敷趣向ヲ作り戯画の板行追付出来それゆへ書印シ候
并ニ上は色と情の染分裾は思ひの遠山染
風流色雛形　全部五巻
付リ睦語は尽ぬ百品染に心の移る色好み
御所風の浮世模様
付リ閨の結鹿子しめつけた寝巻小袖
町風の当世模様
付リ二人寝のぬれ衣透通る肌小袖
曲輪風の仕出シ模様
付リ口舌の抓染中直りは本の白小袖

広告中に「百品染に移る色好み」とあるように、八文字屋・祐信は様々な階層、あるいは職業の「色」を描こうとしていたようであるが、この時点では、「御所風」「町風」「曲輪風」の三種類で五巻構成としていたことがわかる。しかし、翌年二月に刊行さ

れた『色ひいな形』は、「御所風」「侍風」「百性風」「町風」「商職風」の五巻であり、「百品染」の言葉通り、あらゆる階層の人々の性を描き分けている。

本書は、享保七年（一七二九）の取締以前の刊行であるため、刊年や版元、作者名などが明記されている。序文には「作者八文字自笑」とあるが、後に江島其磧自身が『役者目利講』（正徳二年〈一七一二〉四月巻刊）で暴露したように、実際の作者は其磧である。[4]ただし、本文と絵は関連しておらず、それぞれが独立したものとなっている。

版型は横本で、左右に幅広く開かれる絵には、中心となる男女だけではなく、彼らをめぐる人々や屋敷の中の様子、調度品、風景などが事細かに描き込まれている。

階級毎に分けられた巻構成は、公家から侍、百性、町人、商人と、当時の階級に基づいて、高位の社会から低位の社会へと展開している。各巻の構成は同じで、目録、本文第一話、扉絵、挿絵（見開き十二図）、本文第二話となっている。巻一は、冒頭に序一丁があり、巻五は巻末に広告と奥付一丁がある。扉絵は片面半丁で、各階層の生活を描いた絵を囲んで階層に因んだ絵が配されている。

ただし、本書はただ単に各階層の性風俗を羅列したわけではない。序文には次のように書かれる。[5]

此世界へによつとむまれ出て。習ずして学び聞ずして知は色の道。是人間娯しみの根元。（中略）釣夜着の下臥も。莚屏風の透間の風の。ふはつく所作はおなじいきかた。

身分や職業、衣裳や調度品は違えども、色の道の楽しみは同じであり、その振る舞いはみな同じやり方なのだと述べている。本書では、様々な人物が様々な状況で性を楽しんでいるが、まさに「ふはつく所作はおなじいきかた」というような描写も見られる。例えば、「御所風」の内の「つぼねの悪性」では、公家の男が、御屋敷の中で恋慕を抱いた女性と二人きりになる機会を逃さず、

*1　山本ゆかり「故実と絵本・美人画―多田南嶺との共同制作」（『上方風俗画の研究　西川祐信・月岡雪鼎を中心に』所収、藝華書院、二〇〇九年）

*2　白倉敬彦「西川祐信の描いた春画の女」（「国文学　解釈と鑑賞」71―12号、至文堂、二〇〇六年十二月）。なお『艶女玉簾』と『妻愛色双六』の関係については注（15）参照。

*3　本文は国会図書館蔵本（京―三四〇）に拠る。

*4　中嶋隆「『色ひいな形』と祐信画三巻本」（「学術研究　国語・国文学編」48号、早稲田大学教育学部、二〇〇〇年二月）

*5　本文は、太平主人校訂解説『墨摺笑本選四　色ひいな形』（太平書屋、二〇一〇年）に拠る。

慌ただしく思いを遂げている。画面左には、それをふと覗いてしまい、うらやましがる女が描かれている。

一方、「商職風」の「はり物や仕合男」では、張り物屋の裏庭が描かれている。張り物屋とは、洗濯した布あるいは染め物をした布を竹製の道具を用いて伸ばす職業である。張り物屋の男と、この家の主人の姪とが木や打ち張った布に隠れながら逢瀬を楽しんでいるが、それを隣の酒屋の二階から娘が覗いてやはりうらやましがっている。

当然ながら、ここに描かれた情景は、実際に江戸の社会で行われていた出来事をそのまま写したものではない。しかし、身分や社会の異なる人間でも、人目を忍びつつ性を楽しむ心情や、またそれを羨ましがる心情を、「おなじいきかた」として描こうとしたところに本書の一つの狙いがあったのではないだろうか。

『色ひいな形』五巻巻末には、『情ひな形』の予告が載る。

此色ひいな形、十巻の箱入にて出し申す筈に候へ共、板行延引ゆへ先五巻にて出し申候。残り五巻は追付出し申候。則げだいは

傾野染分情ひいな形　五巻

（中略）

右之本当月中ニちがいなく出し申候

五巻の構成は、「傾城」「遊女」「出女」「地若衆」「芸子」となっている。当初は十巻セットで箱に入れて刊行する予定だったが、

●上／図1：西川祐信画『情ひな形』（立命館大学アート・リサーチセンター林美一コレクション蔵）
●下／図2：西川祐信画『情ひな形』（中嶋隆氏蔵）

制作に時間がかかっているので最初の五巻を『色ひいな形』として出し、残りの五巻を『情ひな形』として刊行することになったということを伝えている[6]。「十巻の箱入」として売り出そうとしていたことからも、八文字屋がこの企画にどれだけ力を入れていたかがわかる。

予告では当月中（宝永八年二月）に刊行することになっていたが、実際には翌年の正月に刊行された[7]。予告にあるように、『情ひな形』で描かれるのは全て売色の人々で、公許の遊郭から私娼までとなっているはずであるが、管見の限りでは五巻のうち、一巻しか所在がわかっておらず、全貌は不明である。

立命館大学アート・リサーチセンター林美一コレクションに所蔵されている一冊は[8]、林氏が「会本研究」10号（一九八一年）で紹介したものと同一本で、序文一丁及び「けいせい風」の目録一丁を有しているが（図1）、扉絵半丁には「遊女風」とあり、挿絵及び本文は「遊女風」の可能性が高い。本文は「序　太夫と間夫（まぶ）と客（きやく）の目を抜俄盲（ぬくにふめくら）」六丁と「抜　懺悔咄（さんげばなし）の口切をする局（つぼね）女郎」四丁半の二つであるが、後者には落丁・欠丁がある。また、挿絵見開き六図は全て、片面毎に異なった丁付の図を取り合わせており、本来の状態を知ることは難しい。ノド部分は、綴合わせのため丁付や書名の確認はできない。

ただし、この他に中嶋隆氏所蔵の一冊がある。中嶋本は、目録や挿絵前の本文はないが、扉絵半丁、挿絵見開き十一図の後、本文「抜　懺悔咄（さんげばなし）の口切をする局（つぼね）女郎」五丁半が続く。林本と異なり、挿絵の見開きは正しく合わされている。扉絵は林本と異なるもので、巻名が明記されていないため不明である。ただし、林本の挿絵見開き六図の各片面は、第一図の右片面以外、全て中嶋本の挿絵と重なるため「遊女風」の巻と考えられる。

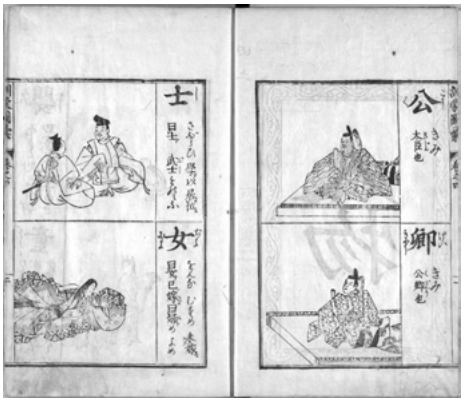
各図には匡郭外に画題があり、中嶋本では「嶋原太夫位」（図2）「さん茶遊」「新町天神」「ぶ礼遊びもんさく」「借リ女郎」「朝酒の名残」「床くぜつ」「よこ切わふ」「たなさがし」「はし女郎茶屋遊」「つぼね遊」と続く。ノド下部には「女郎　丁付」とある。

挿絵では、遊女の種類を細かく分類し、それぞれの遊び方や慣習などを描き分けている。出女、地若衆、芸子の巻については、内容を推し量るしかないが、同様に詳細な分類と描写がなされて

*6　『色ひいな形』の予告から実際の刊行までの流れについては、前掲注（4）に詳しい。
*7　序文末に「正徳二年辰ノ新春」とある。
*8　資料番号 hayE3-109。

いるのだろう。八文字屋と祐信が『色ひいな形』と『情ひな形』であらゆる階層、あらゆる種類の性風俗を分類し、ランク付けをして網羅しようとしたことがわかる。

『情ひな形』について、もう一つ興味深いのは、目録部分の挿絵である（図1）。「けいせい風」として雛型本のように、着物の模様が描かれている。文には「太夫染にしみつく恋のやみは地けんぼう　人の目をくろめるつくりめくら　もやうは思はくにひつたりとしだり柳に鞠はづみのよい手くだ人しれず［カスレ判読難］情は［カスレ判読難］」とある。傾城の性分にちなみ、「恋の闇」から地を黒色にし、遊女を連想させるしだれ柳の模様を配している。また、その枝にかけた手鞠には「はづみのよい手くだ」と、手管の上手さが重ねられている。このように、人物の職業にかけて着物模様を描くというスタイルは、後述する祐信の雛形本に繋がるものであり、この時点でその発想が萌芽していたことがわかる。



●右／図3：中村惕斎作『訓蒙図彙』（国立国会図書館蔵）
●左／図4：吉田半兵衛作・画『好色訓蒙図彙』（国際日本文化研究センター）

## 二、上方における訓蒙図彙の系譜

『色ひいな形』、『情ひな形』が企画された背景にはどのような出版界の動向があったのだろうか。次に、上方における網羅主義的な作品の隆盛についてみていきたい。

あらゆる事象をテキストとイメージで体系化する、いわゆる図解百科事典の嚆矢は、寛文六年（一六六六）に出版された中村惕斎の『訓蒙図彙』と言われている。巻第一の天文から始まり、地理や人物、衣服、器用、畜獣、草花などで巻立てされている。

巻第四は人物で、四十種類の様々な身分、職業の人々が名称と絵によって示されている（図3）。最初に立項されているのは「公」で、大臣の姿が描かれる。以降、士農工商それぞれの人々が続き、医者や僧、娼婦や俳優などが収録され、最後には、南蛮人や中国人などの異国人が描かれる。また、附録として同じく四十種類の職業が収録されている。中

には、乞食の類を記載した箇所もあり、最後は長脚や長人など、空想の人物を描いた項もみられる。巻第四は、多様な身分、職業を高位から最下層まで分類し、名称と絵で示した、まさに人物百科事典といえる内容である。本書には、挿絵を縮小し、更に詳細な注釈を加えた元禄八年（一六九五）刊『増補頭書訓蒙図彙』と、更にそれを増補した寛政元年（一七八九）『増補頭書訓蒙大成』があり、長年に亘り広く読まれた書であることがわかる。

本書の影響は非常に大きく、これ以降は上方を中心に、様々な「訓蒙図彙」ものや百科事典的出版物が刊行される。

その一つが、貞享三年（一六八六）に京都で出版された『好色訓蒙図彙』である。書名が示すとおり、男女の性にまつわる事象を分類して図解し、注釈を加えている。作者、絵師ともに吉田半兵衛である。「天象」「地儀」「人倫」「人支」「衆道意気智界」「器財」「女道濡界」の七部に分かれている。この内、「人倫」部では、殿や奥様、大臣といった高位の人物の他、傾城太夫から湯女、惣嫁など売色業の様々が立項されている。また、「女道濡界」部では、階級や職業毎の性風俗を描いており、最も位の高い公家の閨房から始まる（図4）。中には、扇屋や糸屋、帽子屋などの交わりも描かれており、男女の背景に描き込まれた道具などから当時の職業風俗を知ることが出来る。

「器財」では、化粧道具や衣服の他、性道具や精を付ける食物なども図解されており、『訓蒙図彙』では触れられなかった部分を補完しているとも言える[9]。

翌年には『好色訓蒙図彙』の続編として、同じく吉田半兵衛作画で『好色貝合』が出版される。序文に「僕去年其品々を図にあらはして、好色訓蒙図彙をつくる。今又もれしを集めて、是とあはせて全部となす」とあるように[10]、補遺的な内容で、大黒や間夫、旅籠屋女など、色恋の様々な状況や売色に関わる人物が図解されている。

また、貞享五年（一六八六）に刊行された『絵入人倫糸屑』も吉田半兵衛の作によるものと考えられており、図解百科事典の三部

*9　吉田幸一氏は、好色品々の図解としては菱川師宣画『恋の品枕絵』（延宝五年〈一六七七〉刊）などを参考にしていると指摘している（『好色訓蒙図彙』解題〈『近世文芸資料第十　好色物草子集　複製・解説』、古典文庫、一九六八年〉）。国際日本文化研究センター蔵の『恋の品枕絵』（資料番号一四〇）は貼込帖となっており、乱丁もあるもので、吉田氏の指摘した箇所に該当する部分は含まれていない。また、吉田氏は同解題にて「風俗、言語の百般を絵と注解によって著はすことについては、やはり師宣に学ぶ点が多かつたと考へる」と述べている。

*10　本文は『近世文芸資料第　好色物草子集　本文・索引』（古典文庫、一九六八年）に拠る。

作となっている[11]。ただし、好色的な性格は弱まり、「妾狂」、「臆病者」、「片意地」「短気」など、人間の悪しき性質を分類して描いたものとなっている。

特に、『好色訓蒙図彙』が後続の好色本に与えた影響は大きく、図や内容を剽窃した類の本も刊行された。吉田幸一氏は、その事例として『好色通変歌占』（貞享五年〈一八六六〉刊）や『好色旅枕』（元禄八年〈一六九五〉刊）を挙げている[12]。

このように、吉田半兵衛によって、好色図解百科事典の類が整えられ、後々の好色本や春本にもその分類などが引き継がれていくこととなった。

元禄三年（一六九〇）には、『人倫訓蒙図彙』が京都、大坂、江戸の版元から出版される。本書は序文にもあるように、「上尊き公卿より庶人の賤きにいたるまての其所作をくわしく、家々に尋て来由をたゝし、或は唐大和の書にあるを考えあつめ」た書である[13]。様々な由来を中国や日本古来の書に求めるという姿勢は、故事来歴を尊ぶ故実主義的なものといえる。

本書には約五〇〇種類の職業が収録されている。第一図は、大臣が内侍司とともに天皇に謁見している場面であり、やはり高位の階層から始まる。公家、武家、僧侶と階層毎に進み、商人、細工人から乞食類にまで至る。

同じ属性の人々を職業や身分によって分類するというこれらの方法は、女性読者を対象とした書物の中にも見られる。例えば、元禄五年（一六九二）に出版された『女重宝記』の「女品定め」の章には、様々な種類の女性を見開き一図におさめた図が添えられている。ここには、公家、武家、町人、百姓、妾、火車、傾城、後家が描かれている。

また、『色ひいな形』以降の刊行になるが、享保元年（一七一六）に大坂、江戸の版元合梓の『女大学宝箱』では、職業を詳細に分類し、図解している。本文の上部三分の一には挿絵が四十三図添えられており、様々な女性の職業が描かれている。女性向けの往来書ということもあり、遊女類は立項されていないが、公家、武家の女性から始まり、子どもに手習いを教える女性、水引屋の女性、京都の黒木売りの様子や浜辺で塩焼きをする女性など、これらの挿絵を見ることで、多様な女性の職業を知ることができる。

以下は、『色ひいな形』とその前後に出された代表的な訓蒙図彙、故事書をリスト化したものである。

寛文六年（一六六六）『訓蒙図彙』
貞享三年（一六八八）『好色訓蒙図彙』
貞享四年（一六八七）『女用訓蒙図彙』
元禄三年（一六九〇）『人倫訓蒙図彙』、『女重宝記』
元禄八年（一六九五）『頭書増補訓蒙図彙』
**宝永八年（一七一一）『色ひいな形』**
正徳五年（一七一五）『和漢三才図会』
享保元年（一七一六）『女大学宝箱』

このように、『色ひいな形』の前後には、この世界のあらゆる事象を図解する書物―特に様々な階級や職業を、書物などの典拠に基づきながら分類し、網羅するという書物―が多く作られていたことがわかる。このような流れの中で、階級毎の性生活を図解するという『色ひいな形』が企画されたのである。

## 三、『色ひいな形』から『百人女郎品定』へ

『色ひいな形』の十二年後、八文字屋と祐信はあらゆる身分、職業の女性を描き分けた『百人女郎品定』を出版する。本書は、風俗絵本最初期の随一の代表作と評され、鈴木春信など後続の絵師の粉本となるほど、影響力の大きい作品である。

『百人女郎品定』の成立背景に、同時代の百科事典の隆盛があったことを指摘する先行研究があることは先にも触れた。また、横田冬彦氏は『百人女郎品定』の成立について、先に見た『女重宝記』や『女大学宝箱』からの影響を指摘し、加えて、『百人女郎品定』が、『人倫訓蒙図彙』の女性職種と分類を継承しているとした上で、『人倫訓蒙図彙』で入り混じっていた売色類の再整理を行い、更にその職業を増補したものと位置づけている[14]。

横田氏や山本氏が指摘するように、祐信の絵本制作には訓蒙図彙などの百科事典的作品が大きく影響していたことは間違いない。しかし、それは『百人女郎品定』から始まるのではなく、既に『色ひいな形』から始まっていたことは、先述の通りである。

*11 京都府立総合資料館に上巻、天理図書館に「世の昼狐」と書題簽のある下巻一冊があるが、管見の限りでは、本書の完本を知らない。内容については、『近世文芸資料第　好色物草子集　本文・索引』及び、リチャード・レイン『元禄のエロス　半兵衛七郎兵衛　上方名品艶本集』（画文堂、一九七九年）を参考にした。

*12 『好色訓蒙図彙』、『好色通変歌占』解題（『近世文芸資料第十　好色物草子集　複製・解説』、古典文庫、一九六八年）。ただし、ここで指摘された『好色旅枕』は、作者石川流宣の江戸版のもので、貞享年間に京都で刊行された『好色旅枕』（吉田半兵衛、作・画）ではない。京都版の『好色旅枕』は、百科事典というよりは、色道指南書の性格が強いものである。

*13 本文は国立国会図書館蔵本（寄別一三―五八）に拠る。

*14 横田冬彦「『女大学』再考―日本近世のおける女性労働―」（『ジェンダーンの日本史―主体と表現　仕事と生活』下巻、東京大学出版会、一九九五年）

『色ひいな形』から『百人女郎品定』に至る十二年の間に、祐信は多くの春本、絵本を制作している。左記のリストは、『百人女郎品定』の完成に重要な役割を果たしたと考えられる作品を列挙したものである。

宝永八年（一七一一）『色ひいな形』八文字屋
正徳二年（一七一二）『情ひな形』八文字屋
正徳三年（一七一三）『正徳ひな形』八文字屋
享保元年（一七一六）『雛形都風俗』小林喜右衛門、西村理右衛門、谷村清兵衛
享保元年（一七一六）ヵ『享保ひな形』八文字屋
享保三年（一七一八）『西川ひな形』八文字屋
享保四年（一七一九）『妻愛色双六』八文字屋[15]
享保八年（一七二三）『百人女郎品定』八文字屋

ほとんどは着物の雛形本であり、『色ひいな形』、『情ひな形』、『妻愛色双六』のみ春本である。『雛形都風俗』以外は、全て八文字屋から出版されている。

『色ひいな形』の完結編ともいえる『情ひな形』が出版された翌年、八文字屋は祐信に着物の雛形本『正徳雛形』の絵を描かせた。跋文に「女は姿をかざり天性ならぬ艶を化粧す。然りといへども其人相に応ぜざる模様紋がらありて。見よげなる風俗も品おかしげにげなきを見て。拙き分別袋の狭き中よりおもひ寄て。」とあるように[16]、身分や職業に応じた模様紋柄に分類している点が、本書の編集の独自性といえるだろう。

雛形は、御所風から始まり、御屋敷風、町風、けいせい風、若衆風、野郎風となっており、百性風はないものの、階層毎に風俗を描き分けるという『色ひいな形』『情ひな形』の構成を踏襲していることがわかる。

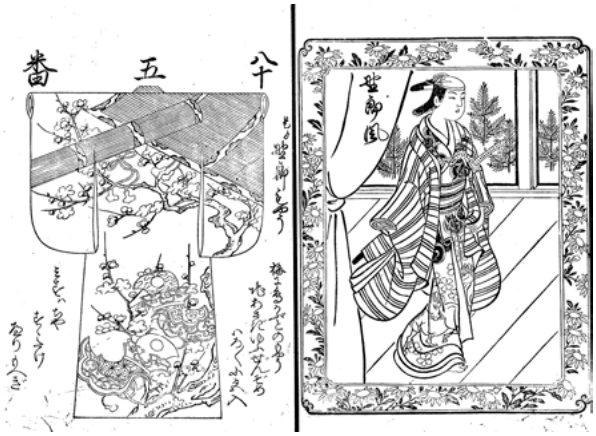
各巻の冒頭の口絵は片面一図の人物図となっている。図5は野郎風の口絵であり、野郎の風俗を大画面で丁寧に描いている。この後に着物雛形図が続く。図5の「八十五番」には「是より野郎もやう　梅に鳥かぶとのもやう　地あさぎゆふぜんぞめ　いろ〳〵に色入　みすはちや　すゝたけへりもへぎ」とある。このように、雛形図は模様が描かれた着物背面と、脇には染方や色などの指定などで構成される。版型を大本にすることで、模様を大きく、詳細に描くことが可能となった。

松平進氏は『正徳雛形』について次のように指摘している[17]。

自笑・祐信二者協力の雛形本は、従来の単なる実用本位の背面小袖図を示すのみでなく、挿入される「姿絵」つまり着衣人物図に新機軸を出したものであった。
（中略）
以下同様に置かれている各巻の口絵は、数年後に現れる絵本『百人女郎品定』ときわめて近い図様である。これは染め見本に過ぎなかった雛形本の中への風俗画の乱入現象と言ってよかろう。

身分や職業毎の風俗を踏まえた『正徳雛形』は雛形本として画期的な企画であったと言える。

その三年後には、違う版元から同趣向の雛形本『雛形都風俗』が出版された。書中に祐信の署名は見られないが[18]、筆致から祐信によるものと考えられる。御所風、武家がた、町風、諸色、茶小姓からなる構成は、ほぼ『正徳雛形』と同じであるが、背面小袖図の合間に挟まれる人物図の頻度は高く、模様や色の指示の他、伊達紋、据え紋が上部に配されている。



●上／図5：西川祐信画『正徳雛形』（東京藝術大学附属図書館蔵）
●下／図6：西川祐信画『西川ひな形』（ニューヨーク公立図書館蔵）

享保三年（一七一八）刊の『西川雛形』では、これまでの階層別の部分けとは異なる構成をとる。五巻構成の内、四巻（「深窓」「色直」「脇留」「物好」）までが背面雛形図を描き、五巻「服紗」では、袱紗の模様図を描く。ただし、「服紗」の後半は「太夫絵」や「町風すがたゑ」、「野郎絵」などの風俗絵が袱紗模様として描かれ、これまでと同様に風俗絵を兼ね備えた雛形本となっている。

また、各巻の口絵は、見開き図となっており、人物の周りには会

*15　なお、本書と同内容のものとして『艶女玉簾』がある。『妻愛色双六』は『役者金化粧』（享保四年正月刊）、『役者五重相伝』（享保四年三月刊）に「大和絵師西川祐信正月二日より本出し申候」と広告が出ている。『艶女玉簾』は本書の改題本と考えられる。

*16　本文は東京藝術大学附属図書館蔵本（貴一一—七）に拠る。

*17　松平進「古典の大衆化と祐信絵本」（「季刊文学」、49号、岩波書店、一九八一年）

*18　所見本は大英博物館蔵本（1979,0305,0.64）。

話文が配されている。これらの図では、雛形本を眺める母娘や、着物の直しをする女性、香具類を前に袱紗の模様を見る男女などが描かれる。中でも「物好」巻の口絵は、雛形本を描く男の図となっており興味深い（図6）。傍らには女がいて「すきなやうにこのめや」という男に対し、「すみゑヲ入レてくださんせ、それ〳〵」と語っている。あるいはこの男に祐信自身が投影されているのかもしれない。

本書の巻末には、「百人女郎品定（しなさだめ）　全部五巻　追付出来」と、『百人女郎品定』の予告広告が載る[19]。実際に、『百人女郎品定』が刊行されるのは五年後の享保八年（一七二三）であり、巻数も二巻となっている。『百人女郎品定』の予告広告が初めて載るのは、正徳五年（一七一五）であり[20]、その時点で構想が始まっていることがわかるが、広告が雛形本の巻末にも掲載されているということは、『百人女郎品定』の成立を考える上で重要となろう。享保初期に次々と雛形本が刊行される中で、『百人女郎品定』が企画されており、それら雛形本での表現が『百人女郎品定』の土台となっていたと言えるだろう。

●上／図7：西川祐信画『正徳雛形』（東京藝術大学附属図書館蔵）
●下／図8：西川祐信画『百人女郎品定』（国立国会図書館蔵）

また、享保四年（一七一九）年に八文字屋から刊行された『妻愛色双六』も『百人女郎品定』のベースとなったと考えられる一書である。本書は、売色風俗のみを対象として、細目化し、分類・図解した春本である。三巻で構成されており、以下に各巻の項目を挙げる。[21]

上巻　太夫職、天職、鹿恋女郎、端女郎、舞子、妾者、色茶屋娘

中巻　風呂、水茶屋娘、泊人、後家茶屋山州、糸屋、扇屋、衣屋、鹿子結、すあい

下巻　つられ者、はすは、おじゃれ〳〵、わたつみ、小歌比丘尼、大こく、間端、惣嫁

上巻の太夫職から始まり、女郎のランク順に記されていく。中には、糸屋や扇屋、わたつみのように、裏で春をひさいでいた職業女も網羅されており、享保当時の売色風俗を知る上でも貴重な資料と言える。

本書は、祐信の春本としては珍しい半紙本の版型で、『西川ひな形』と同様、見開き一図に大きく描かれた人物と会話文で構成されている。

このような作品を経て、享保八年（一七二三）に八文字屋より『百人女郎品定』が出版される。序文の後、上巻、下巻の目録が載り、女性の百種類の階層、職業が網羅される。最も位の高い身分から始まる構成はこれまでと同様である。

ただし、本書では、これまでの訓蒙図彙や絵本などで描かれることのなかった女帝を第一図に描いている。同図には他に、皇后、皇女といった皇族の女性が描かれている。これ以降、公家、神職、武家と続き、町人、商人、百姓で上巻が終わる。下巻は全て売色に関わる女性となっている。下巻最終図は、惣嫁や夜鷹など、売色の中でも最も地位の低い女たちが描かれる。

本書の版型は、雛形本と同様の大本である。このような大きさで、衣裳や装身具、商売道具など細かい部分まで描き分けるには、それぞれの身分・職業に対する深い知識が必要となる。しかし、八文字屋と祐信には、これまでにみてきたように、春本や雛形本で培った経験がある。雛形本では、身分に応じた着物を描き分け、春本では特に遊女風俗を詳細に記録している。そのような作品の集大成とし

*19　ニューヨーク公共図書館所蔵本（1924827）。三井文庫蔵本の刊記では、広告部分が削られている。

*20　松平進『百人女郎品定』解説（『近世日本風俗絵本集成』、臨川書店、一九七九年）

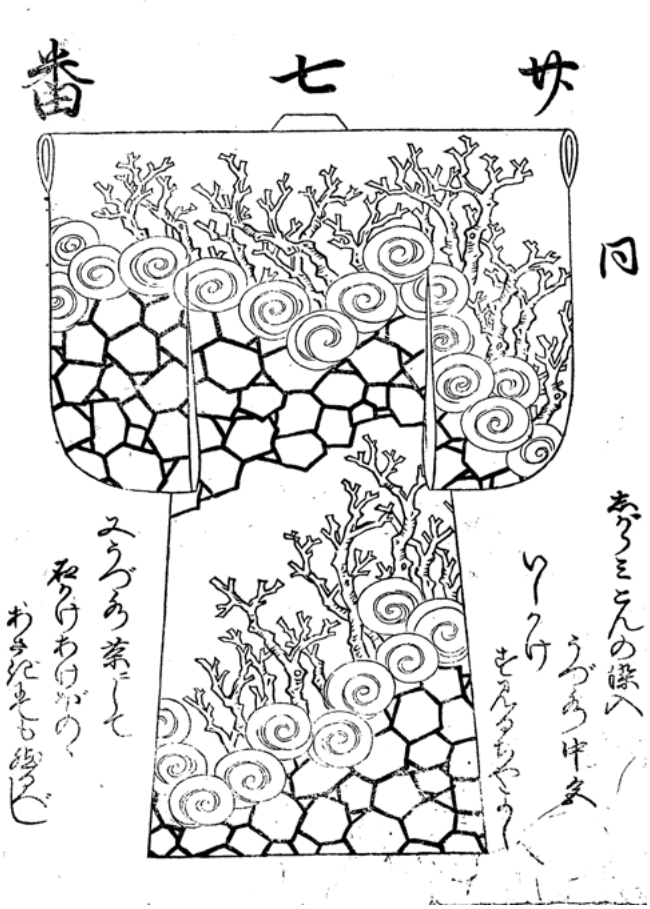
*21　所見本はホノルル美術館レインコレクション蔵本（2008. 0445）。ただし中巻のみ。上、下巻については同コレクション蔵本（2008. 0476）の『艶女玉簾』を参照した。『妻愛色双六』と『艶女玉簾』については注（15）参照。

て『百人女郎品定』が制作されたといえるだろう。

その一例として、着物衣裳の模様の描き分けが挙げられる。小沢直子氏らのグループは、『正徳雛形』で用いられている模様が祐信の他の絵本で利用されていることを指摘している[22]。例えば、『正徳雛形』の傾城風四十五番の模様をみてみよう（図7）。遊女の着物として描かれた裾には、光琳梅が配されている。一方、『百人女郎品定』の遊女を描いた場面を見ると、引舟と書かれた女性の着物の模様が全く同じ光琳梅で描かれていることが分かる（図8）。

また、町風二十七番は、しがらみ、渦水、いしかけと連なる模様である（図9）。『百人女郎品定』の町人の娘の着物は、しがらみは無いものの、図9とほぼ同じ模様である（図10）。

このように、祐信は『正徳雛形』で行った模様の分類を、自らの作品で忠実に継承しているのである。



●上／図 9：西川祐信画『正徳雛形』（東京藝術大学附属図書館蔵）
●下／図 10：西川祐信画『百人女郎品定』（国立国会図書館蔵）

## おわりに

『百人女郎品定』刊行の前年である享保七年（一七二二）には、出版取締令が出されている。その影響によるものなのか、予告の五巻構成から二巻構成へと大幅な変更が行われるなど、出版物として不自然な点があることについては、松平氏や仲町啓子氏が指摘している[23]。また、仲町氏は『百人女郎品定』以降の女性風俗を題材とした絵本に、農工業の女性や売色業の女性が描かれなくなったことを指摘し、「社会のあらゆる構成員たちに目を遣り、現実社会の多様さをそのまま克明に写しとめてゆこうとする風俗画家祐信の執拗な観察眼は、一歩も二歩も後退していると言わざるを得ない」と述べている[24]。祐信は長年共に作品を制作してきた八文字屋から距離をとるようになり、絶えず刊行していた春本にもほとんど手をつけなくなった。

八文字屋・祐信の出版活動において、『百人女郎品定』は大きな転換期における作品と言えるだろう。同時代の上方における網羅主義、考証主義の流れを受け、あらゆる人間を描こうとした八文字屋・祐信は、『百人女郎品定』を区切りとして分節され、それぞれが新たな流れの中で出版活動を続けていくこととなる。

［付記］

雛形本については神谷勝広先生に資料のご教示をいただきました。また資料掲載をご許可いただきました中嶋隆先生、ならびに各所蔵機関に、末筆ながら深謝申し上げます。

*22　小沢直子・伊藤紀之・河村まち子「西川祐信絵本にみられる衣裳文様―祐信作「正徳ひな形」とその絵本との対応について―」（「共立女子大学家政学部紀要」、47号、二〇〇一年）。

*23　前掲注（20）及び、仲町啓子「西川祐信研究」（『日本絵画史の研究』、吉川弘文館、一九八九年）参照。

*24　前掲注（23）仲町論文参照。